

内藤新宿から甲州街道を西へ十里
少しだけわかってきた八王子



八王子は、関東平野の西端に位置して、奥多摩や武相国境の山並みを背にしている。直接背にしている山は1000mに満たぬ程度の山で、大陸から襲ってくる冬型の気候に立ち向かう関東平野北端の山並みに比べると荷は軽いかもしれない。しかし、この地形を利した山城が活躍した時代もあった。

昔風の表現をするならば、「内藤新宿から甲州街道を西へ十里」人と物の行き交う宿場町だった。

町の中心を流れているのが浅川とその支流で、東隣の日野市を抜けて多摩川に合している。

奥多摩や武相国境の山々から流れ出した水は、山を削り谷を走り、東の関東平野へと走る。JR八王子駅周辺には海拔110mほどの平地が広がっているが、北西方面へ数キロほど歩くと上り坂が始まる。奥多摩や武相国境の山々から長く伸びた尾根が緩やかな傾斜で平野に落ちる所だからである。

川の流れからやや上がったところや、川と川に挟まれた長い稜線の上には街道が走り、住宅地が広がっている。谷地川に沿って上る道は滝山街道。甲州街道から別れて青梅につながる街道になっている。

川口川と北浅川の間の尾根を走る道は秋川街道。この道は八王子の町中と武蔵五日市を結ぶ街道。

北浅川の南側から川に沿って走るのが陣馬街道。北秋川の源流を遡り、陣馬山の北側の和田峠を越えて甲州に繋がる道になっている。これらの街道を横切って、高尾と秋川を結び南北に走るのが高尾街道。

八王子駅から武蔵五日市へ行くバスに乗った。にぎやかな駅前を抜けると甲州街道に出て西に向かって走る。街道に沿って色々なお店が並んでいて、しかも人の往来が多く活気がある。50年以上も前にこの町並みを歩いたことがあるが、その時にも町が精気に溢れていた記憶がある。

横山町は、江戸時代には八王子十五宿のひとつで横山宿と言われていた。建ち並ぶ店の中には、古くからの佇まいを残した物も少なくない。

八日町も、十五宿のひとつに数えられて八日市宿と言われていた。横山宿と並んで賑わいの中心にあったと言う。その名が示すように市が立つ町で、絹織物が中心だった。私がサラリーマンになって背広にネクタイの姿になった頃、知り合いの洋品店の人に聞いたことがある。「八王子はネクタイの生産量では日本一」だと。

日本橋や銀座と同様に、繊維関係の間屋から始まった地場の百貨店がいくつもある町だった。

本郷横丁でにぎやかな甲州街道を離れて右折して北に向かう。ここが秋川街道の入口になる。

秋川街道に入るとすぐに、左手に大きなお寺がふたつ並ぶ。手前にあるのが日蓮宗興栄山善龍寺、北側に隣接するのが浄土真宗(大谷派)摂取山護念院善能寺。立派な造りの寺がふたつ並ぶとかなりの迫力を感じる。

善龍寺は、元は滝山城の城下にある真言宗の寺だった。室町時代の長享元年(1487年)に、この寺の住職が

日蓮宗池上本門寺の大阿闍梨日調上人との数日間にわたる法論論争の末、その教説の高さと人徳に感服して日蓮宗に改宗した。その後八王子城の落城により衰微の時期があったが、現在の場所で再興した。

善能寺は、創建時期は不詳らしいが、善龍寺と同様に元は滝山城の城下にあったが、天正年間(1500年代終末頃)に現在の地に移転した。落城した八王子城主中山勘解由家範の長子である勇観空栄が中興開山した。二寺の景観に圧倒されている内にバスは浅川を跨ぐ萩原橋を渡る。僅かな瞬間を利用して目を凝らして上流を眺めると、御前山・大岳山などの奥多摩の主峰が屏風絵のように並んでいるのが見えた。

橋を渡ると少しずつ左にカーブして、北西に向かうようになる。

バスの前方を見ると、秋川街道は長く緩やかな上り坂に差し掛かっていることがわかる。関東平野の末端を離れて、川口川と北浅川に挟まれた尾根に上っていく。

多摩信用金庫中野支店の前のバス停は「**神社前**」。地図を見ると信用金庫の数軒先に天満宮があった。

天満宮はまたの名を六社大神宮とも言う。よく見るとその後ろ側には神明神社もある。天照大神と菅原道真が隣り合わせて住む町ということになる。

一本松という如何にも地味で田舎風なバス停は、古墳の名前が由来のようだった。このあたり(檜原町)は古墳群があったところで、そのひとつが一本松古墳。今では住宅地の真ん中に平坦な緑地として存在しているだけのようにだが、発掘当時は二本松だったらしい。

中央自動車道を潜りながら地図を見ていると、左手の住宅地の中の檜原小学校の隣に**鹿島神社**があることがわかった。寛永21年(1644年)創建で、この辺り(檜原村)の村社だった。武勇の神「たけみかづちのみこと」が祭神となっているようで、成り立ちはもっと歴史を遡るものなのかもしれない。境内に鹿島古墳があり、檜原地区の古墳群のひとつに数えられている

檜原町バス停のあたりはもう海拔140mの高さになる。JR八王子駅前が110m、本郷横丁は123mだったので少しずつ上っていることがわかる。檜原交差点を横切る道は高尾街道、左へ行けば高尾方面、右へ行けばあきる野方面。

松枝小学校がある交差点にあるバス停は**唐松**。今は地名としては残っていないが、その昔は下川口村の字地名だった。バス停の名前だけを拾ってみると一本松・檜原・唐松と木の名前が続き、次が桜株なので、これは何か謂れでもありはしないかと勘ぐったが、残念な結果となった。

次のバス停の**桜株**で下車。来し方を振り返ると緩やかに下っているのがよくわかる。ここはもう海拔150mを越えている。桜株という地名の由来が気になって出かける前に調べてみたがわからなかった。その時にインターネット上の情報を探りまくっていたら「桜株に**首切り場跡**がある」という情報を見つけた。気になったのでそこへ行って見ることにした。バス停の脇にある秋川街道の南側へ下る細い坂道に入ると、街道の真下の石垣を背にしてコンクリートのひな壇のような物があり、その上に朽ちた石仏のような物が並んでいる。五体の石仏はすべて首がなくなっている。一番右側の石柱には二体の仏像が彫られており、下の方に「供養塔 明治13年7月」と刻まれている。石が風化してしまい仏像の彫り込みは辛うじてそれとわかる程度で、隣に並ぶ首なしの仏像も崩れかかっており文字の判読は全く不可能な状態。付近に説明の看板が建っているわけではない。(右画像)



インターネット上で見つけた情報には、「桜株に首切り場(処刑場)があったという言い伝えがある」と書かれているが、事実関係についてはよくわからない。帰宅後にさらに情報を探り続けたが、ここで処刑が行なわれた可能性のある出来事には遭遇できなかった。

この辺りは**川口町**という広い町になっているが、昔は上川口村・下川口村と言った。

歴史を遡ると、この地を押さえていたのは豪族川口氏で、平安時代後期に発生した小規模武士集団「武蔵七党(九党とも言うらしい)」のひとつである「西党」に属していた。西党は武蔵国府以西を勢力圏としており、西次郎宗貞の孫である次郎大夫信久が川口一帯を押さえて川口氏を名乗ったのが始まりと言われている。

川口氏は鎌倉幕府を支える主要御家人の一人だった。源頼朝の死去後北条氏の進出により多くの御家人が消滅していったが川口氏は北条氏とも良好な関係を維持して発展を続け、川口兵庫介幸季の時代には絶頂期を迎えた。この時期(1300~1400年代)に川口村一帯にいくつかの寺も建てられた。

室町時代に入ると川口氏も内紛の渦に巻き込まれることになり、天文15年(1546年)の河越の戦を経て小田原北条氏の覇権の元に落ちることになる。

この西党に属した豪族に端を発した姓名は西・長沼・由木・川口・立川・稲毛・狛江・由比などの多岐にわたる。**川口兵庫介館跡**は、秋川街道をさらに上った川口中学校入口のバス停の近くにあるようだが、時間の都合で行くことは出来なかった。

桜株のバス停から秋川街道を少し下り、北側の住宅地に入ると、**鎮守姫宮神社**がある。付近の建物や施設の名前を見ると「唐松」「からまつ」を冠したものがいくつか見つけられるので、前述のとおりこの辺りは「字唐松」だったようだ。家と家の間に建つ姫宮神社は気をつけて見ないと見落としそうな存在だが、境内末社もある村の鎮守様。説明板を読むと、「主祭神は宗像三女神のひとりである田心姫命(たごりひめのみこと)、1732年に福岡の宗像大社を勧請して川口川の高尾橋の袂に建ったが、昭和36年に現在の場所に移転した」とあった。桜株のバス停で秋川街道を渡って北側の住宅地に入る。一戸建ての住宅が建ち並び中を北へ北へと進むと、途中から下り坂になり川口川の谷に出る。川の流れの一手手前の住宅地の横に**御嶽神社**がある。

神社と言うよりも、鳥居の手前に建つ石柱に刻まれた「困民党指導者塩野倉之助屋敷跡」という文字の方が先に眼に入ってくる。塩野家の屋敷内にあった神社がそのまま残されている。(右画像)

江戸時代から明治に変わって新政府は富国強兵策を推し進める財源として税金に大きな期待をかけた。これまで農民は「租税は物納」していたが、明治6年から「税は現金で納入」ということになった。貧しい農民は納税が困難になり、借金による納税という大きな負担を負うことになり、やがて借金の抵当になった田畑を失う者も出てきてしまった。高利貸しや金融会社などへの負債減額交渉などを中心に行動が激化する動きが各地で起きた。川口村でも明治17年(1884年)、圧政に耐えかねた農民達は、村会議員をして人望の厚い豪農の塩野倉之助に助けを求めた。こうした流れを経て、川口困民党が結成された。



秩父では自由民権思想に基づく自由党员らが中心となって農民とともに秩父困民党を結成して、政府に請願する大きな動きにもなり、武相各地で武装蜂起にまで発展することになった。

やがて騒動は鎮圧されることになったが、塩野倉之助ほか何人もが捕縛され獄中に入ることになってしまった。

御嶽神社の対岸にある**安養寺**に「困民党首領塩野倉之助の碑」が建っている。

安養寺の正式名称は、真言宗智山派犬目山不動院安養寺。永和年間(1370年代後半)に頼鎮上人により開山され、本尊は不動明王。山号の「犬目山(いぬめさん)」は、地名(犬目村)から来ているもの。

御嶽神社から安養寺へ行くのには川口川を渡らなければならない。ここに架かる橋が**唐犬橋**(とうけんばし)。

何やら訳ありげな橋の名前が気になって調べてみたが、北岸(犬目村)と南岸(唐松村)を結ぶ橋として、二村の一字ずつをいただいて橋の名前にしたというあっさりした話だった。(右画像)



犬目という地名も気になる地名である。八王子市犬目町は、川口川の北岸に長く広がる町だが、その昔は犬目村だった。「**犬目**」という地名の由来は、湧き水の

豊かな土地で「井の眼(地面が割れて筋状になっている所)」が由来という説が有力らしい。工学院大学の西側にある清水公園がそれを裏付けるものらしい。

今回の旅はここで終わりだが、最後に「**八王子**」という地名の由来について勉強しておくことにした。

平安時代のこと、延喜13年(913年)の秋、京都から来た妙行という修行僧が深沢山の山頂の岩屋で修業を始めた。夜になると妖怪が現れて様々な出来事が起きる。夜が明けると8人の子どもを連れた牛頭天王(ごずてんのう)が現れて「私に属する神や仲間達はあなたの徳に感服した。是非この地に留まって下さい」と言う。

修行僧妙行は、延喜16年(916年)、深沢山(445m)を天王峰とし、周囲の八つの峰を八王峰として、それぞれの峰に祭祀を祀った。翌年、深沢山の麓に八王子権現という寺を建立。

牛頭天王の眷属である王子を表わす八つの峰(八王峰)は、今熊山(505m)・刈寄山(687m)・市道山(795m)・醍醐丸(867m)・陣馬山(854m)・景信山(727m)・城山(670m)・高尾山(599m)。

天慶 2 年(939 年)、この功績が朱雀天皇の耳に入り、妙行に華嚴菩薩の称号が与えられ、寺の名前も牛頭山神護寺と改めた。その後衰退の時期もあったが、八王子城主北条氏照の命で再興が図られた。

北条氏照が拠点を滝山から深沢山に移して、八王子城を築いたのは天正年間と言われているが、具体的な時期ははっきりしないらしい。

しかし、天正 18 年(1590 年)豊臣秀吉の手により八王子城は落城し、神護寺も焼失した。

のちに曹洞宗朝游山宗関寺となり、明治時代に八王子大火で焼失し再建するも太平洋戦争でまたも焼失。

最終的には八王子城の家老横地監物の屋敷跡である現在の場所(元八王子町 3-2562)にて再建した。

山名の「朝游山」は北条氏照の禅室の名から、寺名の「宗関」は戒名からいただいたと言われている。

以上